

慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム 11

基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画
国際基督教大学 (ICU) の3学期制とカリキュラム



慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター

基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画

「国際基督教大学（ICU）の 3 学期制とカリキュラム」

2013 年 3 月 8 日（金） 16：30 ～ 18：00
慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階 大会議室にて

Program

	司会	佐藤 望（研究会座長・商学部教授）
16:30 ～	挨拶	不破有理（教養研究センター所長・経済学部教授）
16:35 ～	講演会	日比谷 潤子（国際基督教大学（ICU）学長）
18:00 ～	質疑応答	

講演概要

(講演会チラシより抜粋)

東京大学による「秋入学構想」をきっかけに、義塾でも学期制の問題が論議されています。教養研究センター 2012 年度基盤研究「セメスター制度の研究 ―「秋学期入学問題」を見据えて」は、3 学期制を骨子とする学事日程案を提示しました。今回は、3 学期制を取り、国際化では一歩進んだカリキュラムを展開する ICU の日比谷学長に、ICU の取り組みについて、お伺いします。日比谷氏は、かつて慶應義塾大学国際センターの教員であられ、慶應の事情もよくご存じで、慶應へのメッセージとご提言がいただけることと期待しております。

日比谷潤子氏（国際基督教大学（ICU）学長）

国際基督教大学（ICU）教授。2012 年より学長。専門は言語学・音韻論で、ペンシルベニア大学で博士の学位を取得。慶應義塾大学国際センター助教授を経て、ICU へ。主著に『多言語社会の外国人学習支援』（慶應義塾大学出版会）、『はじめて学ぶ社会言語学 ことばのバリエーションを考える 14 章』（ミネルヴァ書房）など、多数の論文がある。



はじめに

教養研究センター所長 不破有理

日比谷先生、今日は日吉キャンパスまでお越しいただきありがとうございます。国際化を目指して、慶應義塾が、あるいは日本の大学がどのように進んでいくべきかについて、いろいろな方向性があるかと思います。

一昔前、金融行政などの政策を指して、護送船団方式ということばがよく使われました。日本において銀行が破綻することがないと信じておりましたら、バブル経済がはじけ、破綻する銀行も出始め、大手銀行も次々と再編されました。護送船団方式でいけると思っていたら、いつの間にか、逆らうことができないような経済や時代の流れに押し流されることになったわけでございます。慶應を含めて、国公立や私立の大学がいろいろな取り組みをしていらっしゃると思いますが、果たして、慶應はどのような形で、受験人口が減っていく中で、学生を確保し、教育の質を高め、保つことができるのか、これは大きな問題であると思います。まだごく少数とはいえ、高校の段階で、日本の大学ではなく、直接海外の大学を進学先に選ぶ受験生も出始めております。東京大学は秋学期入学という旗を揚げた理由は、留学する東大生の比率がきわめて低く、留学生も学部レベルではかなり少ないなどの学内事情もあったようですが、その一方で、おそらく、日本の受験生の最先端の動向や、国際大学ランキングで端的に示される世界における東大の地位の低さなどの危機感があったのではないかと推察いたします。

日比谷先生は、5年前に実施いたしました教養研究センターの外部審査の機会に、審査員として来ていただきました。そのときの報告書を読んでおりましたところ、「このままでは慶應はだめだ、慶應を見限ってICUへ移ることにした」という衝撃的な日比谷先生のお言葉が目飛び込んでまいりました。その先生が再度、慶應の日吉キャンパスにご登場いただき、今日はICUでの取り組みについてお話しいただけるといことで、さぞや刺激的な、かつまた建設的なお話を拝聴できるのではないかと期待しております。

国際化と申しても、なにをもって国際化と呼ぶのか



不破有理

という点から考えなければいけないのですが、大学が日本国内に充足するのではなく、国際的な教育環境の中で学生を育てるためには、やはり学問的なレベルと教育レベルの両方の魅力がなくてはならないと思います。仮に留学生の数を競うのであれば、そのような大学でなければ、留学生は来ないと思います。ですから、学問と教育の両輪が学期制の議論の中で、どのような形で可能になるのか、この点も絡めて私は期待を込めて、日比谷先生のお話を伺いたいと思います。ご講演の後には質疑があるかと思うので、ぜひこの機会に、古巣に心を許していただいて、いろいろな内実をお聞かせいただければと思います。よろしくお願い申し上げます。

はじめに

研究会座長・商学部教授 佐藤 望

本日は、ICU、国際基督教大学の日比谷潤子先生に来ていただくことができました。ICUは、皆さんもご存じのように、戦後にできた学校ですけれども、いち早く国際的なプログラムを中心とするカリキュラム、日本の規制の中で、さまざまな交流プログラムや国際的な基準に合ったカリキュラムを工夫しながらやってこられました。今回、学内で話題になっております学期制の問題に関して、重要な示唆がいただけるものと期待しております。

日比谷潤子先生は、ICUの教授で、現在学長です。ご専門は言語学です。もともと慶應の国際センターに2002年まで勤めておられまして、慶應の事情もよくご存じで、その後、ICUに移られてから、今年度から学長を務められるという激務の中を、古巣の慶應に活を入れに来てくださいました。最初に40分ぐらいお話をいただいて、それから質疑応答に重点的に時間を取るような配分で、今日は進めさせていただきたいと思います。



佐藤望

国際基督教大学（ICU）の 3 学期制とカリキュラム

国際基督教大学（ICU）学長 日比谷潤子

日比谷潤子 ご紹介いただきました、日比谷潤子です。とてもお久しぶりの方が何人かいらっしゃいますが、あちこちの会合で、慶應のときにお世話になった方がお声をお掛けくださいます、今も親しい交わりを持つことができるのは、大変にうれしいことだと思っております。

前に日吉にまいりましたのは5年前のこのセンターの中間評価のときで、あまり変わったので本当にびっくりいたしました、この建物もそのときに初めて入りました。その後、150 周年のときに日吉キャンパスで式典があったのですが、私の前任の学長に招待状をいただきまして、その代理として参列しました。天候の悪い日だったのですが、ビニールのフード付きのレインコートを着込んでいたところ、実際に式典が始まりましたら雨がやみ、久しぶりに塾歌を歌いました。今日は、それ以来の日吉です。

今回は佐藤先生からある日メールをいただきまして、辛口の講演と書いてあったんですね。私としてはごく普通に話ただけでしたのに、そんなに人々に衝撃を与えたのかと思うのですが、よそでいろいろな人に遭ったりしても、何か話題になっていますよ、すごいことを話したでしょうと言われてしまっています。今日はせっかく呼んでいただきましたので、慶應に辛口ということではなく、ICU の現状についてもそのままにお話を、全体として、大学がよくなっていくということがとても大事だと思いますので、それを目標にしたいと思います。

大学の志

ICU は今年がちょうど 60 周年の年で、2013 年 4 月に入学する人が 60 期生になります。大学がどうしてできたかとか、どういう歴史を持っているかということをもっと浸透させなくてはいけないと言っているのですが、『要覧』の第 1 号、最初の 2 年間のものに、この大学はどういうところが書いてあります（図 1）。

そもそも、国内だけでなく海外からも寄付をいただいていた大学ですし、この後、もう少し詳しくお話ししますけれども、日本人だけでつくった学校ではなく、半分ぐらいはそうじゃない人によってつくられた学校です。最近、いろいろな大学で、「国際化対応」ということを言われていますが、どちらかという、ICU は「日本化対応」をしてきたという気もします。

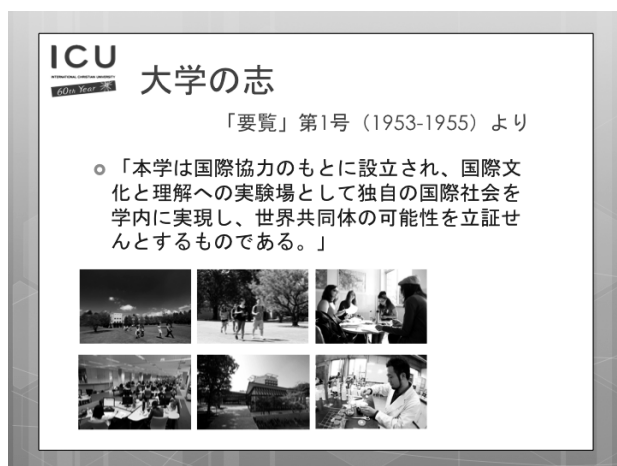


図 1

日本の大学として生きていかなければいけませんので、いろいろな規制の中でとおっしゃいましたが、そのようにある程度合わせつつ、たとえば独自の国際社会を学内に実現するとか、世界共同体の可能性を立証するとか、そういったことを考えてきた大学かと思います。

開学の経緯

もう少し開学の経緯をお話しします。1953年に最初の学生が入ったんですが、寄附行為を決めたのが1949年、本当に戦後間もないころです。この時点で、大学の特質が規定されたかと思いますが、学長になった人は、元同志社大学の総長だった湯浅八郎です。この人は2回、戦前と戦後に同志社の総長をしているのですが、1回目のときは民主的な発言をしたために、当時の政府からにらまれまして、同志社を追われました。

戦争中も家族とは離れ離れになってアメリカにいたという人で、その人が戦後の日本に帰ってきて、また同志社の総長をしていたのを懇願して来てもらってできた学校がICUです。ですから、そういう考え方をもち、またアメリカで教育も受けた人がつくった大学だし、初代学務副学長もアメリカ人、初代教養学部長もアメリカ人。教員は、スイス人等もいましたけれども、日本人ももちろんいましたけれども、その大半も海外で教育を受けた人と、あとは東京大学から移ってきた人等がつくった大学ですので、伝統的な日本の大学観とは異なる構想の下につくられた大学と言っていきたいと思います。

その最たるものが、当時、すでに東京大学の教養学部はありましたけれども、大きな大学の中の1つということではなく、少人数のリベラルアーツ教育を目的とする、もちろんユニバーシティという名前は付いていますが、リベラル・アーツ・カレッジをつくる、一学部の大学として発足しました。

大学設置要綱（1952年）

1953年に大学が始まる前に、その設置要綱というものがあるわけですが、ここに目的および使命が12項目書いてあります。

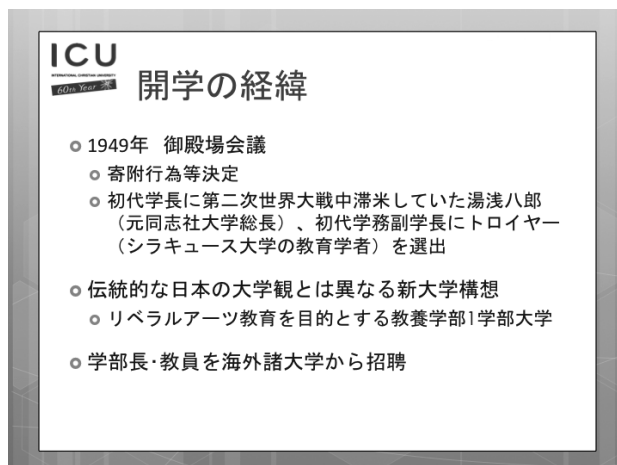


図2

大学設置要綱（1952年）目的及び使命（合計12項目）

1. 学問の自由を操守し、総合研究を奨励する。
2. 独立の思索能力と科学的批判力の涵養に努める。
3. 教育に精進し、たえず批判と評価を通してその進歩改善に努力する。
4. 実社会との生きたる連携を保ち、高速なる真理が民主社会の原動力となることを謀る。
5. 教授は本邦のみならず、広く世界各国に亘ってこれを求め、（後略）
6. 学生は人種、国籍、宗教の如何を問わず、（後略）
7. 日英両語を学園用語として国際的学園生活を実現する。
.....
9. （前略）世界的エトスの確立を期する。

1、2、3、4などはどんな大学でも言うことかと思いますが、5以降に、国際的な大学ということがよく表れているかと思います。

1つは、「教授は広く世界各国に亘ってこれを求め」と、さっきお話しした通りです。学生も「人種、国籍、宗教の如何を問わず」いろいろな人を入れるということで、1953年は4月入学だけでしたけれども、最初の9月入学が1955年ですね。私はまだ生まれておりませんでした。その後ずっと、後で詳しくご説明しますが、4月の入学と9月の入学を続けております。

7に「日英両語を学園用語とする」というのがありまして、日本語と英語のバイリンガルの大学で、これは教

育の面だけではなくて、たとえば身近な例で申しますと、食堂のメニューに、今はいろいろなアレルギーなどがありますから、何がどのくらい入っているとか、カロリーがどのくらいとか、そういうようなことも日英両語の表示になっております。

それから9に「世界的エトスの確立を期する」ということが書いてありまして、あと12までは直接関係がないのですが、たとえば8には寮をつくって、全寮制にすると書いてあるのですが、全寮制だったことは一度もございません。今では、学生の25%が学内の寮に住んでいますが、寮はすべていわゆる日本人と留学生が混住している寮で、4人で1つのユニットになっているものとか、2人部屋のものなどがありますけれども、なるべく違うタイプの人と一緒に住むような工夫もしております。

ICUのカリキュラム（4月生）

4月入学生の現在のカリキュラム、図3は2008年からのものですが、実はアメリカ型のリベラルアーツ大学を目指してつくられましたけれども、日本対応をしなければいけなかったのが、発足当時は人文科学科、社会科学科、自然科学科（その後、理学科に改称）という3つの学科がございました。

その後すぐ、語学科ができ、教育学科もでき、その後、国際関係学科というのが1990年代の初めにできて、しばらく6学科制を取っていたものを、2008年の教学改革で、学科制度をやめました。ただ、ご承知の通り、日本の大学は学科に定員が付きますので、教養学部アーツサイエンス学科（一学部一学科）という格好にしたのです。

1学年の定員が620人で、今は530人が4月に、90人が9月に入ってきています。私は、もう少し9月生を増やしたいと思っておりますが、なかなか質のいい9月生の確保は難しい面もございますので、今のところはそういう分け方になっております。

後からお話することに関係がありますのは、入ってくるときは、別に何を専攻するということを決めないというか、心の中では決めているかもしれませんが、以前のように、社会科学科に入るとか理学科に入るとい

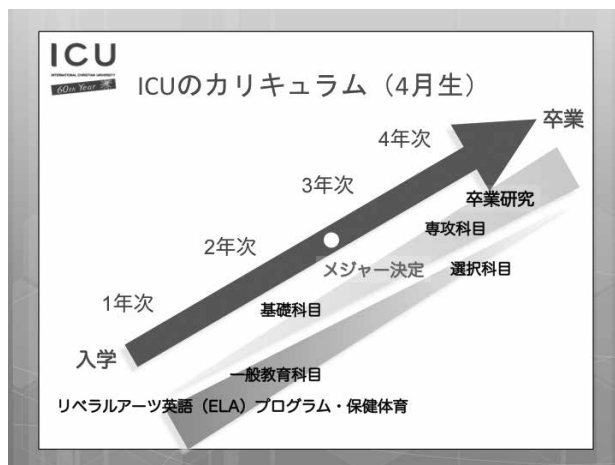


図3

うような入り方ではありませんので、2年の終わりにメジャーと言っていますが、専修分野を正式に決定するカリキュラムになっています。

学年暦

いよいよご関心のあるところかと思いますが、どういうカレンダーで運営しているかといいますと、先ほどから申し上げておりますように、入学の機会が4月と9月、1年に2回ありまして、3学期制度です。4月生と9月生はどこが違うかというと、4月に入る人は、高校の少なくとも最後の2年間で日本の教育システムで過ごした人です。

一方、9月入学は、高校の最後の2年間で日本以外の教育システムで過ごした人となっておりますので、具体的に言うと、いわゆる皆さんが考えになるような留学生、それから帰国生ですね。それと国内のインターナショナルスクールの出身者もかなりいまして、これも日本の教育システムではありませんから、9月に入ってきます。

そうすると、東京大学が最近、提唱したような9月入学とはちょっと違うんですね。あの話は、日本の高校を出た人がギャップタームというのがあって、いつ本当に正式に学生になるかはいろいろ考え方があると思いますが、9月から学び始めるということです。一方、ICUの秋入学や9月生は、今の制度では日本で中等教育制度最後の2年間は送らなかった人ということになります。

今はこういう時代ですから、必ずしも国籍と1対1に対応しませんので、帰国生も多いし、インターナショ

ナルスクールに行っている人もいろいろな人がいますので、日本のパスポートを持っているけど、ほとんど日本語ができないような人もたくさん9月に入ってきています。

学期は、通常多くの大学が15週を2学期やって30週ですけれども、それを3つに割っておりますので、10週の学期が3回あるとお考えください。

以下は今年度のものですが、4月の3日に春の新入生の入学式をしまして、オリエンテーションとかいろいろあるのですが、4月10日が履修登録日になっています。

学年暦（4月/9月入学・3学期制）2012年度

第1学期

4月3日	春季新入生入学式
4月10日・11日	履修登録・授業開始
6月20日～26日	期末試験

第2学期

9月1日	秋季新入生入学式
9月5日・6日	履修登録・授業開始
11月15日～21日	期末試験

第3学期

12月4・5日	履修登録・授業開始
2月27日～3月5日	期末試験

登録日の翌日、今年ですと11日から授業を開始して、授業がどんどん進んでいきまして、6月20日から26日までが期末試験となっています。少し話が細かいですが、期末試験が始まる前の2日間は、リーディングピリオドという名前で呼んでいるのですが、試験の準備をするための授業のない日が置かれています。

この後、9月に入った人は6月に卒業しますので、6月の30日までに夏の卒業式がございます。7月と8月が夏休みになって、国際化対応とはそもそも何かということも後でお話したいと思いますが、たとえば学生が海外に勉強に行きやすくするというようなことを1つの柱として考えていますが、6月中にすべてのことが完結しているというのは大事なポイントです。

キャンパスに戻ってきて、9月の秋の入学式が1日にあります。秋の方が人数が少ないということもありまし

て、オリエンテーション期間が短いのですが、5日に履修登録をして、翌6日に授業を始めると。秋も、リーディングピリオドが2日ありますけれども、期末試験が11月15日から21日までです。

この後、短い休みがございます。後ほど3学期制の実態といいますか、課題というところでまた詳しくお話ししますが、教員の中には、3学期制は忙し過ぎるという人はかなりいます。死んでしまうとか病気になってしまうという話もよくあるのですが、本当にすごく忙しいのは、この秋と冬の間です。

ここは期間が短いです。比べると、春学期は別にたいしたことはないのです。それから、冬学期もまあよろしいのですが、11月のこの時期に試験が終わって採点をして、成績を出して、全部それが出ていないと、冬学期の履修登録を学生ができないことになりますので、慶應でもいろいろお考えだと思いますが、秋と冬の間のスケジュールがきついということはお考えになっておいた方がいいことかと思います。

余談ですが、一般的にICUの教員は教育熱心だといわれています。それは、私もそう思います。何かこう言うと、慶應の人は教育熱心じゃないと言っているようですが、そういう意味ではないのですが、ICUに行って授業をするようになったら、1学期の授業をどう構成するかとか、一回一回の授業に何を盛り込むかとか、それからオフィスアワーとか、学生にどう個別の指導をする、あるいはグループ学習を必ず取り入れて、たとえばそのプレゼンテーションの事前のリハーサルを見るとか、個々の授業に教員が時間を使っているし、工夫もしているということに私はとても感心しました。

ICUに行ってから、新しいテクノロジーを使った授業の仕方やグループ学習を取り入れるようになりました。私はあまりグループ学習などというのは、それまで取り入れていなかったのですが、授業効果調査というのがあり、それぞれのコースが終わると、学生のアンケート調査があって、自由記述があるのですが、グループ学習がないのがけしからんと散々書かれまして、初めはそれのどこがそんなにいいのかなと思ったりしましたけれども、いろいろな人の実践例などを聞くと、これは大変によいことだと思うようになりました。そういうことをまじめにやっていると、大変に忙しくなってしまうわけです。

大半の人は一生懸命やっているけれども、中には、そういうところは一生懸命ですが、成績を期日までに出したりするという点について、あまり得意でない人がいます。それが大きい問題になるのが、この秋と冬の間で、ほかの学期は何とかならないこともないが、秋学期はとにかく期日までに成績を出してくれないと、冬学期が始まるときに、成績が入っていないという事態になってしまうのです。

履修登録日というのは自分の担当の学生の成績を見ながら、今学期履修はどうするかということを相談するのですが、あるとき、ちゃんとやっている学生がある科目についてインコンプリートでIが入っていたので、これはどうしたのと言ったら、いや、自分も分からないんだというので、すぐに教務課に電話をいたしましたら、何々先生は成績が間に合わなかったんですよと言われたことがあります。こういうことは実務的には注意すべきことだと思います。

その忙しい秋と冬の間が終わって、12月に入学式はなく、4日に登録をして、5日に授業開始。もちろんクリスマス、お正月というのがありますので、キリスト教の大学なので25日は必ず休みと。26日は休みもとれますが、一応、学校は開いていると。だけど、授業は24日で終わります。年が明けて1月は7日から始まりまして、またリーディングピリオドがあって、2月27日から3月5日までが期末試験です。今日は3月8日ですが、期末試験が終わって、遅い人はまだこれから成績を出しているかなという時期に当たります。

ICU にとっての3学期制の意味

3学期制がいいか2学期制がいいかというのは、議論の分かれるところだと思いますけれども、今の日本のカレンダーだと、3学期制で春学期が6月に終わって、7月、8月の夏の間に、海外で行われるさまざまなプログラムに学生を派遣できるのは、大変に大きいメリットだと思っています。

4月に始めるのではなくもっと前倒しにできれば別ですけれども、もし2学期制で15週取るということになったら、どう逆立ちしても、7月の初めから学生を海外に送ることはできません。そのために3学期制で春がちゃ

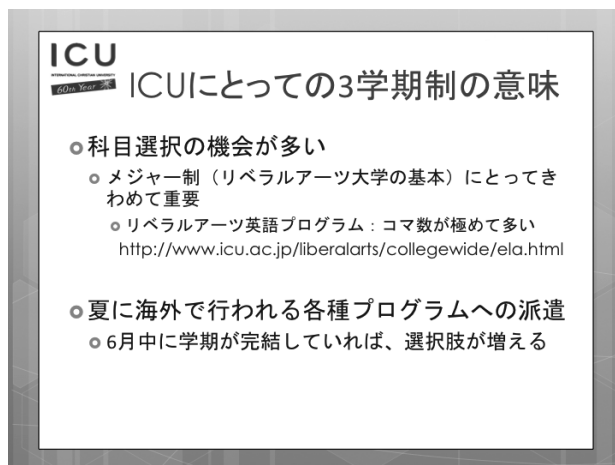


図4

んと6月に終わっているということが重要だと思います。

私どもは、夏の学生を受け入れるプログラムは、集中的な日本語教育プログラムしか現在はありませんが、それも7月になったところで、8月の初めまで、6週間のプログラムを組んでおりますので、その受け入れにとっても、7～8月に教室が空いているというのは大変重要なことだと思います。

ただ、そのことを除けば、多くのアメリカのリベラルアーツ大学は、私どもと同じようなメジャー制度を取っていて、入学してしばらくたってから専門の分野はこれにするというところばかりですが、その大半は2学期制(セメスター制)の大学です。9月から12月までが1学期で、1月から5月ぐらいまでが2学期という学校なので、メジャー制のことだけなら、別に2学期でやっても構わないと。

ICUで特殊なことは、初年次教育です。さきほどお話しましたが、バイリンガル大学なので、日本の高校を出てきた人はそれなりに英語の能力を高めないで、英語で研究活動を行うことはできません。

それを可能にするために、昔はFEP (Freshman English Program) といって、その次は2年生にも少しかかるので、「Freshman」を取って、ELP ですね。「English Language Program」といういたのですが、今年度の初めに、これをリベラルアーツ英語プログラム、ELA というふうにさらに改編しました。

これが、1年生のときはかなりのコマ数になりますので、ほかの科目を選択する機会がありません。2学期制にしてしまうと、1年のときの科目選択の機会が2回。2年も2回ですけれども、最初の3回ぐらい

で、メジャーはこれというのを決めなくてはいけませんし、個々のメジャーによってメジャー選択要件というのが付いていまして、基礎の科目、たとえば2科目は取って、その平均成績がこのぐらいとかいろいろな付け方がありますが、なかなか厳しいわけです。

3学期制ですと、1年のときに3回と、2年のときも2学期まで入れると、5回科目を選択するチャンスがあるので、たとえばよくあるタイプで、心理学を学びたいと入ってくる学生は毎年、大変に多いんですけども、初等統計をやったところで、多くがつまづくのです。「私は人の悩みを聞きたいと思って心理学と思ったけど、これは見込みが違った」というのはよくある話です。

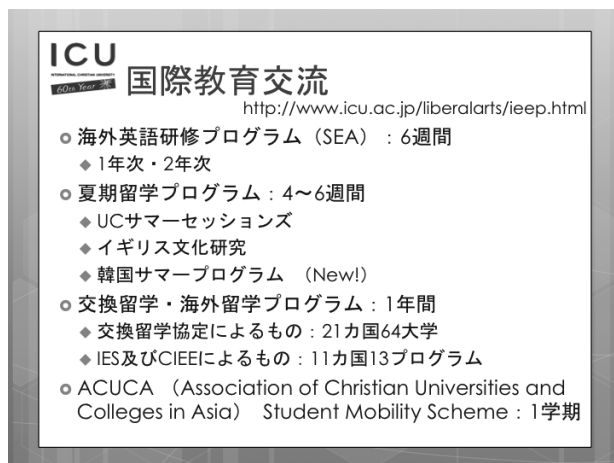
そういうことが1学期目に起こったら、2学期目はたとえばそれでは社会学を取ってみるかみたいなことになるわけですが、そのプロセスがある程度何回かできるようにするという点では、今のメジャー制度にとって、ICUにとっては、3学期制は意味があると思います。

慶應も文学部などはもちろんどの専攻へ進むかということはありませんけれども、入学して取った科目によって専攻がどうなるというような考慮をあまりしなくてもいいのであれば、夏をどうするかという問題がなければ、2学期制であっても、それはよろしいのではないかと私は思っています。

国際教育交流

さて、国際教育交流についてですが、これはいろいろなプログラムがございます。学年の進行に従って申し上げますと、7～8月を空けて、学生がどこに行くかという、まず海外、特に英語圏に学びに行くというプログラムがございます。これは6週間ですから、7月の始めから8月の半ばまで行っています。

特に1年次に行く大変によいことがあるのは、先ほどお話ししたリベラルアーツ英語プログラムの単位の一部をこれで取れますので、うまくいけば、それ以降が少し楽になります。秋学期以降、その代わりに、メジャーの基礎科目や一般教育科目をもっと取れるようになりますので、勉強が進みます。2年次にも少しこのプログラムがありますが、それはそれほど大きいものではございません。



ICU 国際教育交流
<http://www.icu.ac.jp/liberalarts/ieep.html>

- 海外英語研修プログラム (SEA) : 6週間
 - ◆ 1年次・2年次
- 夏期留学プログラム : 4～6週間
 - ◆ UCサマーセッションズ
 - ◆ イギリス文化研究
 - ◆ 韓国サマープログラム (New!)
- 交換留学・海外留学プログラム : 1年間
 - ◆ 交換留学協定によるもの : 21カ国64大学
 - ◆ IES及びCIEEによるもの : 11カ国13プログラム
- ACUCA (Association of Christian Universities and Colleges in Asia) Student Mobility Scheme : 1学期

図5

それから、2年次以降に参加するものとして、夏の留学するプログラムが、4週間のものから6週間のものまでありますが、これは英語を学ぶものではなくて、それぞれの専門分野の勉強をするためのもので、1つはUCサマーセッションズで、これはUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）とバークレー（カリフォルニア大学バークレー校）のサマーセッションに行って、それこそどんな科目でも、能力があれば取れますけれども、その科目を取って、単位をもらって帰ってくると。

イギリス文化研究は、長年ケンブリッジ大学で行っていましたが、今年からリーズ大学を加えました。ここでもイギリス文学であるとか、イギリスの歴史であるとか、政治であるとか、そういった科目の単位を取って帰ってきます。

それから最後に、2013年の夏から新たに始めるのが、韓国のサマープログラムです。これは、延世大学と高麗大学に6週間送るのですが、英語で専門分野を学ぶコースです。延世や高麗の先生がお教えるになるわけではなくて、主にアメリカの大学の先生が、夏をソウルで過ごして、6週間教えるというもので、これはどうして始めることにしたかということ、延世はそれほどでもないのですが、高麗大学はもう10年ぐらい交流協定を結んでいるのですが、完全な入超で、向こうからたくさん来てくれるのですが、なかなか私どもの学生が行かないという問題を抱えています。

すごい入超になってしまって、交換ですから、双方の大学に学費を払って行くということなので、こちらから送るのはやめましょうかという手紙までもらったりして、いや、そんなことはなくて何とかしましょう

ということにしたのですが、向こうから1年来る代わりに、こちらはサマープログラムで複数名を送るという形の協定を考え付いて、これは香港の大学などとも、夏ではないですが、別の時期に同じようなことをしています。これは、本筋と外れますが、今、インバランスが続いているということも手伝って、延世も高麗もかなりの奨学金を付けるとも言ってきたわけです。

フルスカラシップをもらえる人と部分的な人がいて、それはその選考をICUに任せますよと言われたのですが、1年だと全然行かなかったのに、大勢の人が申請してきたのです。2013年、もう参加する学生は決まっています。私は全部のアプリケーションフォームを見たりするわけではないですけども、あまりにも顕著だからといって、報告が上がってきたのが、TOEFLがこのぐらい、GPAがこのぐらい、志望動機を書いてということがありますが、本当に大勢の人が、動機として奨学金がもらえるのでこれに応募したと書いてきたのです。

「自分は本当に外国に行きたい、けれど経済的に1年間の交換留学のようなものは難しいと思っていた」、近いですから旅費が安いということももちろんあると思いますけれども、とにかくフルスカラシップを出してくれて、6週間で3つのコースまで取れるのですが、それだったらぜひ行こうと思うという学生が大変に多く出てきましたので、よく言われていますけれども、やはり経済的な理由で海外に行かないという新聞などに書いてある話はそれなりに本当なのだなと思ったところです。

それから、従来から行っているものですが、1年間の交換留学の協定によって、外国に行くというのが、現在、21カ国64大学に送っております。海外留学プログラムは、IEEやCIEEという団体ですが、ここを通して留学するもので、これが11カ国13プログラムございまして、これらはすべて2年の秋から選考を始めて、3年の夏から1年間、4年の夏に帰ってくるというものです。

現在、交換と海外留学で1年間行くものは、学生4人に対して1人の枠があります。先ほどお話ししましたように、90名は9月生で、9月生がこれで行けないということはありませんが、そもそも日本の制度でないところで高校までずっと過ごしてきた人もいて、そういう人の中には4年間日本にいたいと思う学生もいるでしょうから、実質的には、4人弱に1人ぐらいの割合で行くチャンスがあるわけです。おかげさまで、ほぼこの枠を埋め

て、毎年、あちこちに送り出しております。

最後に、図5のACUCAというのは、アジアのキリスト教系の大学がつくっているコンソーシアムで、日本、韓国、台湾、香港、フィリピン、タイ、インド、インドネシアの8つの地域に、これは1学期学生を送り、向こうからも1学期来るといいます。

履修システム

国際交流についてはひとまずここで終えまして、次に履修のシステムについて、ご説明したいと思います。毎学期、何の科目を取るか、年に3回科目選択の機会がありますので、重要なことなのですが、一般教育科目と体育の実技は、前の学期のある時期に予備登録をします。

一般教育科目は、150名でキャップ制を敷いておりますので、それを超えた場合は、抽選にかけております。ある程度結果が分かり、前の学期の成績もウェブで事前に自分で見るができますので、何か落としてしまったときなどは履修計画に変更が生じますので、それらを踏まえた上で、履修登録日に、それ以外の専門の科目を登録します。

ICUはアドバイザー制度を持っております。准教授以上の専任教員が、学生から見ると、私のアドバイザーは何々先生という人がいるわけです。登録日には、その先生のオフィスに行って、登録票をプリントアウトしていくわけですが、今学期はこういうものを取りますよと言う。

標準の受講単位数としては、各学期13単位。体育実技は、1科目3分の1単位なのですが、年間で取ると、ちょうど3学期ですから1単位になるという勘定になります。13単位というのは、後で詳しくお話しますが、多くの科目が3単位科目か2単位科目ですから、たとえば3単位科目を3つ取り、2単位科目を2つ取ると、合計13科目になりますので、1つの学期に学生はこういう取り方をすると、5科目並行して取っていると思っていただければよろしいかと思います。

これが標準ですが、成績に問題がなければ、アドバイザーが許可をすれば、18単位までは取れます。さらにGPAが累積3.4以上で優秀だという人は、アドバイザーと、更に学部長が許可をすれば、18単位以上、取るこ

とも可能です。

私が実際にアドバイザーをしていた学生でも、18単位以上を取った学生はいます。この人は大変優秀な人でしたが、何でもそんなにたくさん単位取らないといけないことになったかという、英語の教職を取りたいと。それから合わせて、日本語教員の養成プログラムがありまして、これは別に教職のような資格ではありませんが、伝統的に、特に北米の日本語教育に携わってきた人が多い大学ですので、これを全部やって修了証をもらい、アメリカの大学の大学院に行きたいといった場合に、いくつかの大学では、入れればかなり高い確率で、TAに採用されるので、そのプログラムも取りたいと希望していました。

その学生は、教職と日本語教員の養成プログラム両方の授業を取り、21単位ぐらいをコンスタントに取っていましたが、たぶん私が教えた人の中で一番よくできる人で、GPAは4.0で、現在、オーストラリアのある大学で博士課程に行っています。

時間割

次に、時間割についてですが、先ほど3単位科目や2単位科目と申しましたが、ICUは1時限が原則として70分です。これは色で見ていただくといのですが、横組み型というのは、時間割(図6)の1のような月水金の1限。それから、2のような月水金の2限。それから、月水金の3限もそうです(図6の3)。あるいは、火曜の1限、2限と、木曜の1限など(図6の4)。それから、その裏、火曜の3限と木曜の2限、3限というようなことで(図6の5)、3単位科目だったら週に3回授業があるのが原則です。

これらを横組み型といいます。ICUは昔はこういうタイプの科目のみだったのですが、私が勤めるようになる少し前から、1時限(70分)×3で210分を半分に割り、105分ずつを週に2回行うパターンができました。これをスーパー時限と呼ぶことにしているのですが、スーパー4限というのが、月木か水金の組み合わせがございます。(図6の7、8)

それ以降は縦組みで、俗に「ゴロチ」と言われているのですが、5限、6限、7限を縦に続ける(図6の9～

ICU 時間割

	月	火	水	木	金	土
第1時限	1	4	1	4	1	6
第2時限	2	4	2	5	2	6
第3時限	3	5	3	5	3	6
昼休						
スーパー4	7		8	7	8	
第4時限						
第5時限	9	10	11	12	13	
第6時限	9	10	11	12	13	
第7時限	9	10	11	12	13	
第8時限				12		

- 1時限は70分
- 横組み型
- 組み合わせ型
- 縦組み型
- スーパー4時限 (105分)

図6

ICU 時間割枠：3コマ科目

- 横組み時間帯型：月水金の1限、2限、3限
- スーパー時限型：月木のスーパー4限
水金のスーパー4限
 - 一般教育科目、基礎科目、英語開講科目の枠（月木）
 - 200番台以上の専攻科目の枠（水金）
- 組み合わせ型：火3限・木2-3限、火1-2限・木1限
- 縦組み連続型：月から金の5-6-7限、土の1-2-3限
 - 演習・実験を含む科目
 - 科目の性質上、縦組みが必要な科目

慶應義塾大学教養研究センター

図7

ICU 時間割枠：2コマ科目

- 横組み時間帯型：月水の1限、月水の2限、月水の3限
水金の1限、水金の2限、水金の3限
月金の1限、月金の2限、月金の3限
月木の4限
(一般教育科目/基礎科目の枠)
水金の4限
(200番台以上の専攻科目の枠)
- 縦組み連続型：火木の1限、火木の3限
火の1-2限、木の2-3限、土の1-2限、土の2-3限、月から土の5-6限、6-7限

図8

13)。あるいは、土曜の1限、2限、3限を続けるものもございます(図6の6)。これらは、特殊な、たとえば実験の科目や演習の科目などもありますが、多くは、非常勤の先生がお教えになっている科目で、専任の人は月水金などでも問題ありませんが、非常勤の先生が、

ICUのような遠いところまで週に3回も行くことはあり得ませんので、縦組みのところに入っています。(図6～8)

教員の意識

図9は、実は私が作ったものではありません。もちろん、ご許可をいただいてまいりましたが、東大にいらして筑波にお移りになりました、金子元久先生と2012年夏に、明治大学で行われました、私立大学情報教育協会というところでご一緒したのです。先生は基調講演をなさったのですが、そのときに、教員に対して、授業の改善の方向を尋ねた結果です。

全国大学教員調査が2000年に行われたそうで、5,192人もの先生がお答えになったということです。国際化というと、たくさん留学生が来るとか、日本からたくさんの人が外国に学びに行くということに視点が行きがちで、それはもちろん大事なことです。

いろいろな学生がいることによって、多様なキャンパスをつくるのは大事なことだと思いますが、国際化の一番大事なことは、国際水準で教育も研究もすることが一番の根幹で、そうであれば、留学生も来ると思います。教育については、やはり1学期の間、そんなにたくさんの科目を取らないで、せいぜい5科目ぐらいにしておいて、少ない科目を集中して学ぶことが大事だと思います。

教員にとっても、同じ6種類のコースを年間通して教えるとしても、通年、1週間に6種類違うものをしていくよりは、ICUはそうですが、1学期に2種類のコースを週3回でやって、それが3倍になる形の方が、はるかに効果的だと思います。1学期に同時並行して取るコースの数を減らすことによって、学生はある程度数の科目に集中して学ぶことができるし、教員も2つぐらいの科目に集中して時間をかけて、準備もするし、指導もするのがよいと思っています。しかし、この調査は大変ディプレッシングなことに、どういうことをしたら状況が改善されると思いますかと、5,000人もの先生に聞いたところ、私が大好きな、3回ではなく2回ですが、この「週2回の授業などを通じて、学生が個々の授業科目に集中できるようにする」というのはすごく人気がないのです。

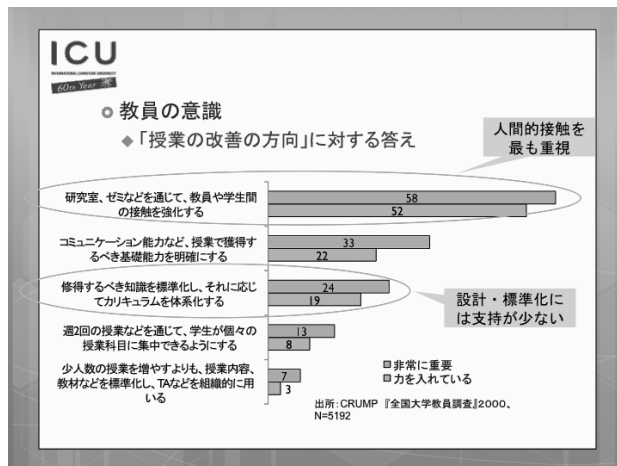


図9

一方、たとえば人気があるのは、この「人間的接触を最も重視」という、これは金子先生がお書きになっていることですが、そちらには非常に人気がある。あるいは、一番下に、「少人数の授業を増やすよりも、授業内容、教材などを標準化し、TAなどを活用する」のも、著しく人気が低いわけです。「設計・標準化には支持が少ない」と書いてあるのですが、私は国際化対応のために一番必要なことは、ここの2つかなと思います。

科目番号制

その国際化対応ということで、よく話題になるのが、科目の番号制、ナンバリングかと思っています。ICUは開学以来、科目には番号を振っておりますけれども、次頁の図10の例は、現在の授業ではありませんが、私が授業をするなら、教える科目です。

LNGというのは「linguistics」の略ですので、科目の種類です。214というのは、200番台なので、言語学メジャーの中級の科目で、音韻論というのが科目の名前。このように個々の科目に番号が振ってあります。まず、共通科目というのは一般教育科目のことですが、00番台の科目は4年までずっと取れますけれども、専門については、100番台を取って、200番台を取って、300番台を取って、大学院の科目も許可があれば取れますので、次は400番台というような体系化をすることが重要かと思っています。

成績評価

成績評価は図 11 の通りですが、10 点刻みで、A、B、C、D。D は合格です。60 点を取れないと、E となって不合格になりますが、これを図 12 のような形で計算をして、GPA を出しております。

GPA 制度

GPA をどう使っているかといいますと、成績をモニターするということもありますが、3 学期連続、または通算で 4 学期間、1.00 未満となった場合は、除籍となります。いい方は、逆にあまり少ない単位しか取っていないと関係ないのですが、12 単位以上取った場合に、3.7 以上の GPA になりますと、「Dean's List」に載って、これはある種のご褒美です。それから、交換留学などは、原則として、GPA が 3.0 以上の人が行けます。奨学金等の審査にも GPA を使っております。

GPA の大事なことは、E に 0 点を付けることで、いわゆる保険科目というのですか、たくさん取って、最後に捨てられるようにすると、GPA の効果はありませんので、履修登録をしたら、変更期間がありますけれども、そこが済んだら、もう変えられないので、取った授業は最後まで受けないと、GPA は下がることになります。

これは、自分が選択した履修科目に責任を持つということや、できそうもないことをするのは計画性がなくてよろしくないの、自分のその時々能力や個人的な事情に応じて、計画性を持つという習慣を付けるためにはよろしいかと思います。

授業評価の方式

最後に、授業評価の方式についてです。

ANT というのは「Anthropology」ですので、人類学で 101 ですから、基礎科目です。E というのは、英語開講の科目です。

これは文化の比較という授業なのですが、9 月に開講されていまして、これを取るのは、9 月に入ってきた 1

ICU 科目番号制		
○ 主体的な科目選択に不可欠		
例) LNG	214	音韻論
↓	↓	↓
科目分類	中級科目	科目名
◆ 001-099 : 学部共通科目		
◆ 101-199 : メジャー基礎科目、全学共通初級科目		
◆ 201-299 : メジャー専攻中級科目、全学共通中級科目		
◆ 301-379 : メジャー専攻上級科目、全学共通上級科目		
◆ 381-389 : メジャー専攻特別研究科目 (演習)		
◆ 391 : 卒業研究		
◆ 400-599 : 学部高学年生が履修可能な大学院科目		

図 10

ICU 成績評価	
○ A : その科目において要求される程度を超えて特に優秀な成績 (評点100点~90点)	
○ B : その科目の要求にふさわしい優れた成績 (89点~80点)	
○ C : 一応、要求を満たす成績 (79点~70点)	
○ D : 合格と認められる最低の成績 (69点~60点)	
○ E : 不合格 (60点未満)	

図 11

ICU GPA制度	
○ A=4点	
○ B=3点	
○ C=2点	
○ D=1点	
○ E=0点	
◆ 該当する点数に科目単位数を乗じて算出、登録した全科目が対象	
◆ 3学期連続もしくは通算で4学期間1.00未満となった場合は除籍	
◆ Dean's List: 前学期のGPAが3.70以上、かつ12単位以上の科目を登録、単位修得した者	
◆ 交換留学、奨学金等	

図 12

年生、英語ができて、9 月生は代わりに日本語教育を受けますけれども、日本語を学びながら、自分の関心がある分野の基礎科目を取っているというときに、最初に取り科目です。

4 月に入った 1 年生は、先ほどのリベラルアーツ英語

プログラムとぶつかりますので、取れない仕組みになっています。日本育ちの人、4月生で、この科目を一番早く取れるのは2年の秋で、それまでにリベラルアーツ英語プログラムが終わっていますから、英語でもそれなりにやっています。

授業評価について、強調していることは、いわゆる一発勝負はだめですよと言っているのです、できるだけ複数の異なる基準で評価をする。この場合は、出席と授業への積極的な参加ということで10%。それから、ディスカッションを授業で強調しているのですが、そのディスカッションのために事前に1,500字のエッセーを書いて、そのディスカッションの準備をしてくるのですが、これが15%のものが2回あります。

それから、文化の比較の中でも、食べ物についての人類学的な考察をする授業なのですが、10月に約1カ月、自分の食生活を日記に付けて、それを分析して発表するのですが、これが30%、期末試験が30%になっておりますので、期末試験でたとえ満点を取っても、それだけでは落ちると。「Food Diary」とプレゼンが素晴らしくても、60点ですから、Dになるという具合で、複数のさまざまなことをやらないと、よい成績が取れないようにすることを奨励しております。

授業評価の方式

ANT 101 E Comparative Study of Cultures Evaluation and Grading Policy:

Attendance and Class Participation. Students are required to attend every lecture. Attendance will be taken regularly and those who fail to attend class without previously receiving approval will be penalized. Students will also be asked to regularly contribute in class and those who fail to will not receive full credit. (10%)

Two 1500 Word Discussion Preparation Essays. There will be two in-class discussions held in the course, each of which has an assigned theme. Students are required to write a short essay that addresses the discussion's theme and submit it on the assigned discussion date. Discussions are mandatory. Students who fail to attend them will not receive credit for them. (15% each. 30% of total grade)

Food Diary Analysis and Presentation. Each student will be required to write a four week food diary from 3 - 31 October. After completing the diary, each student will be required to analyze the diary and write up their conclusions regarding their individual food patterns and choices in a 1500-1800 word critical essay. Working in groups, students will then share the results of their analyses and present them before class. (30%)

Final examination. A final examination will be held on the last day of class. (30%)

質疑応答

A 貴重なお話をどうもありがとうございました。細かいところでご質問をしたいのですが、この3学期で、それぞれ4月3日に入学式があって、10日といって、授業開始が11日という感じですね。3学期ですと、最初から履修登録とあるのですが、うちの大学などですと、授業を選ぶためのオリエンテーションの授業期間があるのですが、そういうのがない場合に、どういう形で、学生が授業を選択するのでしょうか。

日比谷 授業が始まりますと、大ざっぱに言うと最初の2週間はどんどん授業は進みますけど、一応、見ている期間なので、履修変更期間がその後に来ます。ですから、1週間いくつか可能性があるものを見に行って、その上で、その変更期間に変更したところで確定です。

A その変更というのは簡単にできるのでしょうか。

日比谷 本当は今みたいに簡単にしてはまずいのではないかと私は思っています。なぜかという、履修登録日にアドバイザーと面談するのは、無理のない履修とか、いろいろなことを考えてやっているわけで、登録しているよというのは、手でサインするんです。実は今は会って話をすることはそれなりに意義があると思うんですけども、将来的には、オンラインでピンナンバーか何かを渡すという話もあるんですね。

それだったら、変更のときも面談の方がよいと思うんですが、変更期間はもう授業が始まっていますから、とても会う時間もないから、自分で変えられてしまうので、散々言って、こんなに成績が悪いんだから減らしておけと言ったのに、登録変更期間に自主的にたくさん増やしてしまって、その結果、また成績が1.0を切ってしまうようなことが、残念ながらあります。

B 私が正しく理解しているかどうか分からないですけども、「4月生のICUのカリキュラム」(図3)と、「3学期制の意味」(図4)で、メジャー決定が3年次に掛かって行われるということで、お話の最初に東京大学の新学事暦の話も出ていましたけど、東大でいうと、「進振り」の問題が大きくて、この話が起ってきたと聞いているんですけども、ICUの場合に、そういった東大的な「進

振り」を目指す履修行動とか、そういったものは起っているのかどうかをお聞きしたいです。

日比谷 教学改革をするときは、こういうメジャー制度にしようというのは、途中で出てきたアイデアで、最後はこれにしようと言って決めたんですけども、そのときにいろいろなところで言われたことは、いわゆる進振りをしないんだったら、これはすごくいいよねと言われたんです。だから基本は、ここは何人とか、そういうものは一切ございません。

だけど、集中すると困りますよね、当然。この卒業研究というのは卒業論文が必修なので、そんなに短期間に教員の数を増減できるわけではもちろんありませんので、そこはある程度、考えておかななくてはいけないと。それで、メジャーを決めるときに、GPAが全体でいくつでないところには行けないというようなことは一切していないのです。ただ、たとえば言語学のメジャーにしたい場合は、言語学1というのと言語学2というのがあるんですが、どちらも基礎科目ですが、これを両方履修していない人はだめですよというようなメジャー選択要件は付けています。

それぞれやり方はある程度任されていますので、何科目取ってないとだめというようなことは、不可能なような科目数はもちろんできませんけれども、たとえば基礎



日比谷 潤子氏

科目2つだけじゃなくて、もう少し上の200番台のレベルの科目を含めて付けることもできますし、あるいはこれとこれとこれの中からたとえば2科目とか3科目みたいな付け方もできますし、全体のGPAに言及することは許されないんですけど、その基礎科目なり、メジャーの科目の平均GPAはたとえば2.5とか3.0というようなことを付けることはできますので、多少そこでふるわれると。

しかしながら、この制度になって、フルサイクル回しまして、今、5年目の学生が間もなく卒業しようとするところですが、実際に偏りはあります。これは大変に面白いことですが、ある程度の目安というものが欲しいので、今日はお話ししませんでした、「アカデミックプランニング」という考え方を4年間を通して導入しています。要するに主体的に学ぶ、自発的な学習者を育てるということをモットーにしておりますので、自分が何を大学でしたいかと。たとえばこれをメジャーして、加えてフランス語をやりたいとかいうような、それからクラブ・サークル活動はこういうのをしたいというのがあります。留学もここでしたいとか、大学院に行きたいとか、就職はこういうところとあるんですけども、それを自分で計画を立てていくと。

ですから、「アカデミックプランニング」の主眼は、計画を立てたことをエッセーに書くんです。それで、学生には入学する直前、間もなく出てきますが、この4月に入る人は3月の終わりごろに、ウェブ上でパスワードを与えて入力してもらうようにしているんですけど、エッセーを書いて入れるわけです。そのときに、拘束しないんだけど、今の時点、入学前の時点で、あなたはどのメジャーに進みたいですかというのを3つまで書くんです。1つは絶対入れなくちゃいけなくて、2、3位は記入自由ですよとなっています。過去5年間、これは変わることはない傾向ですが、入学前に、ICUに入ってくる人の全体の25%、つまり4人に1人は国際関係論に進みたいと書いてきます。

ところが、同じことを1年の終わりに、1年間、勉強が終わりましたと、1年間振り返ってどうですかと、またエッセーを書くんですけど、その段階で、あなた、メジャーは今はどう考えていますかという、国際関係論に行きたいという人はだいたい10%ぐらいに減っています。

その15%がどこへ行ったかということは、最終的にメジャーを選択して、みんなどういふところに行ったかという、これもコンスタントですけど、過去5年間、一番人気があるのは社会学です。その次がメディアです。その後は、年によってばらつきはありますが、経済、それから歴史学。それで、これはICUらしいかもしれないんですが、哲学、宗教学なども人気がありますし、人類学もわりと人気がある。文学もそれなりにいるというような感じです。それから、理系のメジャーが5つあるんですけども、生物、化学、物理、数学、情報科学と、この中で一番人気があるのは生物学です。

最初のご質問に戻りますと、いわゆる進振りはしないけど、それなりに選択要件を付けていると。だけどういふ集中は出てきて、そろそろ社会学は、ここしばらくの間はかなり人気が高いだろうから、ちょっと教員の配置を換えるかなというようなことを考え始めているところですよ。

C 大変参考になるお話をありがとうございました。時間割の質問ですけども、先ほどのお話の中で、縦組みは非常勤の方が多い。それというのも、1週間に1回の出講とのことでした。それは慶應の場合もよくある話で、語学なので、週2日をやっている科目は私たちはあるんですけども、なかなか2回来ていただける人を探すのは難しい。

そうした場合に、縦組みに合った、たとえば実験科目だから、それに適した縦組みというのはいいと思いますが、科目はたとえば語学その他で、本来は横組みが合っているのに、非常勤の方をお願いするために、縦組みになってしまうことがあるとすると、その学習効果という面ではマイナスもあるかと思ったんですけども、もしご苦労されていることがありましたら、お聞かせいただけますか。

日比谷 とても苦労しています（笑）。先ほどお話ししましたように、語学、伝統的に英語教育は、まあ、いいと思うんです。ほとんど専任しか教えてないわけですね。英語教育プログラムの専任というのは、長い間いる人もいますけれども、5年ぐらいの任期でどんどん替わっていく人もいますが、ほぼ全部専任でいきますから、よろしいですね。

日本語教育の方は、もうちょっと非常勤依存率が高いですけど、まだいいですが、それ以外に、いわゆる第2外国語に当たるものを、教学改革以前は選択外国語と呼んでいたんですけど、教学改革以降は世界の言語という名前を付けて、それがフランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、韓国語とあるのですが、これらは非常勤依存率が高いので、おっしゃるようなことは起きています。

今の制度ではなかなか、週に複数回来てくれる人を探すというようなことができませんので、本当はもうちょっと何とかしたいところです。ただ、そういうイメージをお持ちの方は多いかなと思いますけど、ICUは英語という感じがすると思うんですよね。私はよく授業は全部英語でしようと言われるんですが、バイリンガル大学だからそんなことはないという話をします。開学のころとは、世界の情勢もものすごく変わりましたから、今まで通りに日本語と英語のバイリンガル大学で、4月に入った人と9月に入った人にそれぞれの言語のアカデミックな力を付けることはその通りだと思うんですけど、プラス1で、世界の言語の科目を、必修化するつもりはないですけども、できるだけ大勢の人にしっかりやってほしいと。

世界の言語のパンフレットというのがあって、そこに授業担当者が各言語の紹介を書いています。本当に長く教えている、非常勤ですけど、いいロシア語の教員がいて、ずいぶんそれでロシア語ができるようになって、その道に進んだ人も過去にはいるんですが、その人がある年、パンフレットに、ICUの人はICUに来るだけのことはあって、みんなとても英語がよくできるようになるんだけど、自分の母語と英語をやって、もう1つ、たとえばロシア語か何かをやらないと、英語も本当にできるようにはならないんですよと書いたのですが、私はその通りだと思います。

このプログラムはもっと力を入れたいので、今、スペイン語と韓国語とフランス語は専任がいるんですが、もうちょっと専任が欲しいなということと、これはもっと、根本的な問題ですが、アラビア語を開講すべきだという声が大変、今は高まっています、それは特に私どもはキリスト教の大学なので、キリスト教の基盤がある中で、やはりイスラムとの対話はものすごく重要であると。

学生の希望で一時期、イタリア語を開講しろというの

が、何か山のような署名を集めて持ってきて、大変だったんですが、署名はそんなに集まってないけど、よく考えると、イタリア語よりはアラビア語だねというような話を今しています、これはどうなるか分かりませんが、留学する先も、大学で勉強する内容も、今までの伝統であるとか、よいところは保ちつつも、イスラム世界への理解であるとか、アジアやアフリカへの留学というようなことを、今の学長のミッションに掲げていることもありますので、そうすると、非常勤だけでというのは難しくなると思います。それは苦労しているところです。

D 私は、ICUで3コマ連続という授業を受け持っていたことがあり、私自身、アメリカの大学を出ていたりするので、ICUでのアメリカ的なシステムのあり方は理解しているつもりです。その一方で、我々のような日本的な総合大学では、もちろんご経験があるので、よくお分かりになっていると思うのですが、GPAの重要性とか、「保険」が掛けられないような、履修できる単位の上限設定の必然性などを、すごく声を大にしていつも説くのですが、あまり理解されていません。今、我々がカリキュラムを変えていくとか、それからいろいろなことをやろうとすると必ずまず問題視されるのが、教室の問題とか、非常勤の方が多すぎるとか、そういったようなことです。これの大きな1つの原因は、GPAがないということと、学生が「保険」として必要以上に多くの授業を履修するという事実があります。学部によっては、履修できる単位の上限をかなり高く設定していて、積極的に授業を取りなさいと指導をしているところもあるくらいです。

でもこれはむしろ逆じゃないかとは思いますが。このあたりの重要性を少し我々に対してアピールしていただけないでしょうか。

日比谷 さっき言ったことと関係がありますけれども、人間の能力は人によって違いますので、成績のいい人は取ってもいいとしているのは、そのためだと思いますけど、普通の人々が同時並行して十分な時間をかけて勉強できる科目数は、ある程度限られると思います。1つは、散々言っていますが、とにかく1週間に1回しかやらない授業をたくさん取るのはやめた方がいいと私は思っています。

これは本当に伝道師のように、この話をしております、大学改革実行プランが出た後、いろいろな大学を回ってフォーラムをしているんですけども、去年の夏に大妻女子大学で、これは「YouTube」に動画が載っていますから（前半：<http://www.youtube.com/watch?v=3tDN7yekFpE>、後半：<http://www.youtube.com/watch?v=uSPXrxPQB18>）、ご関心がある方は、私がいかに伝道したかを見ていただけるんですけども、とにかくほかのことは何もしなくていいからこれをした方がいいと言ったんです。

会場校の学生を入れて、一緒にディスカッションするのが目玉になっているフォーラムで、大妻女子大の学生さんがかなり来たんですけど、並行して何か15科目とか取っているというんです。教職のあれもあるし、これもあるしで、実際、私、本当にそれは大変だねと思いましたけど、いろいろな何かの報告を書くとか、何とかかんとかで、とにかくいろいろなことをいっぺんにしなくちゃいけないから、とても大変だと。

学長が去年の4月から荻上紘一先生になって、一緒にパネリストをやったので、学長に週に複数回授業にして、同時に取るものは減らしてほしいと頼みなさい、と私は言ったのですが、その後、個人的にお話ししたときに、荻上先生がおっしゃったのは、自分ももちろんそうしたいけど、結局システムを変えるときがものすごく大変だから、おたくみたいに最初からそうやっているところは

いいけれども、中途からやるのはどうやって実現するんだろうというお話はありました。

本当に並行して1学期に取るものは絶対に減らした方がいい。それを集中的にやるということと、それから、保険の禁止は、人数の多い大学でアドバイザーが一人ずつ面接するようなことは現実的じゃないと思いますけど、たとえばシステムを構築して、あんまりたくさんの科目を登録しようとするとはねられるようにするとか、そういうことはできるのかなと思います。

保険科目は、本当によろしくない。それで、今日のこれが一番の辛口かもしれませんが、私は三田にいましたときに、西校舎の大変に大きい教室に、ある学部の先生の授業で、何か期末のころになると、不思議な人の集まり方があるわけです（笑）。そのときにどうも、よく分からないんだけど、何か試験に何が出るというようなことをおっしゃるらしいので、山のような学生が来ると。

そのうちに試験期間が来て、その教室だけでは入りきらないから、たくさんの教室が取ってあって、でも登録した人数が来ないことを前提に学期中の教室を配当しているのは、私は、申し訳ないけど、大学の恥だと思います。試験を受けさせないわけにはいかないから、試験の日になると、間を1列空けるとかそういうこともあって、ものすごくたくさんの教室が押さえられるわけですが、少なくとも登録した人が入るように教室を配当するよう



にしたら、当然足りない。いくら建物を建てても追いつかないくらいに足りないと思うので、保険で登録する人を、どのようにできなくするかというのはまた問題ですけど、できなくすればよいと思います。

この話には後日談があって、その科目の試験がその日に行われていることが、たまたま自分の試験もあったので、私は分かったんです。それも西校舎だったか忘れましたが、試験が終わって帰ってきたら、たくさんの学生が複数の試験会場から出てくるのですが、コピーを、出てないわけですから、学生がもらうわけですね。別にオープンブックとかではなくて、見ないでやっているんだと思いますが、ぎりぎりまでそのコピーを片手に勉強してきて、コピーをしまって試験を受けて、教室を出てきたときに、その大量の学生がその大量のコピーを捨てるわけです。もう分かっているから、清掃の方々が、ブルーの大きな箱のようなものに何かロープが付いていて、引っ張るようになっているのですが、それを持って教室の前に待機なさっていて、試験が終わった学生は、どんどん出てきてはそこへコピーを捨てていくという光景を見たことがあるんですね。

再三言っているように、そのように教室を配当するのはまずいし、授業に出てなかったのに、試験を受けに来ることを想定して、教室を、試験会場をアサインしていると思うんですが、それもよろしくないし、どこからあれだけのコピーがわき出てきたのか、自分でお金を払ってやっているからいいという考え方もありますが、そもそも環境に悪いし、ぜひやめた方がいいと思います。

E 今のことと関係もするかもしれませんが、世界基準で、学生さんたちに対する教育もあると思いますけど、同時に、これは教える側に係ってくるとしていますけれども、どのような形で、学生たちにも授業評価をさせ、またそのフィードバックがどのようになされ、ある意味で教える側やそのコンテンツがどのように評価されるかについて、よろしくお願いします。

日比谷 頭の痛い問題で、これはICUに対して辛口という感じだと思うんですが、今、ICUで行われているものは、「授業効果調査」という名前を付けているんですね。うまく名前を付けて、要するにこれは授業の評価じゃないというんですよ。それぞれの授業が効果的で

あったかどうかを調査して、教員はそれをもって、授業の改善に役立てるという話ですが、これが導入されたのが、私は2002年にICUに行きましたけど、その何年前らしく、絹川正吉元学長の頃です。この学長は信念の固まりのような人でした。

この先生が絶対に授業の評価を入れなくてはならないということでやろうとしたんだけど、いろいろほかのファクターもあったと思うけれども、猛烈な反対に遭って、なかなかできないと。だけど、授業評価を昇任などに使うことは、取りあえず先の段階にするにしても、授業に効果があったかどうか教員にフィードバックされるようにはしようというので、そういう条件の下に、ようやく導入されたものなので、もちろんこれは役に立ちます。

結構、辛辣に付けてくるから、それを見て、こういうところを改善しなくちゃいけないということもありますし、自由記述もあるので、コメントも参考になるから、それなりの機能はあると思いますけれども、でも見ない人もいます。それは、見ましたかというようなことをチェックしているわけではないですし、1つの可能性としては、見てから、教員側からコメントを戻せるというシステムがありますので、たとえばこういうコメントが来たけど、自分の意図はそれとは違ってこうだったから、それはそのやり方がうまく伝わらなかったのかもしれない、というようなことをアップしたりすることができて、やっている人もいます。しかし、そんなに多いわけではないので、もう少しきちんとフィードバックされるべきだと思います。

昇任などのときに、たとえば新しいコースを開発したシラバスを出すとか、自己評価書みたいなものを出すんですけれども、そこに教育面でこういう努力をしたみたいなことを書きますので、それをみんなで読んで評価するような風土はありますけれども、どこの大学も同じだと思いますが、ちゃんとやっている人は問題ないんですね。FDだ、何だとかいうことをするんだけど、何も問題ない人が皆勤賞で来るんですね、ああいうものは。

本当に来ないと困る人は一度も来ないということですから、それは一握りは何とかしなくちゃいけないという人がいる。ただ、今の授業効果調査は、もう少しやり方を変えるべきだというような声も出てきているので、これから私の任期中に変えるかなぐらいの感じ

だと思います。

B たびたびすみません。今の授業評価に絡むことで言うと、ICUでは、ほかの教員に対して、授業の公開はされているんですか。

日比谷 特に一般教育科目を中心に、公開をしています。なるだけ見に行くようにとは言っています。ただ、なかなか自分の授業の裏になっていて行けないということはあるんですが、特に新任の人は、ぜひほかの人の授業を見て、そこから学んでほしいということは言っています。

B たとえばそれをした後、できる、できない、いろいろな条件で、教員によっては積極的に見る人もいるでしょうし、そういったものをどこかであらためて持ち寄るような形で、授業についての検討をするとか、そういうような機会が教育の中で設けられていますか。

日比谷 それは制度的にあるわけではありませんけれども、FD活動などで、そういうことをしたことはあります。

司会 授業評価のこと、それから学生の履修の問題、GPA、根本的なテーマが少し続いておりますけれども、今日は事務系の方がたくさん来ていただいていますので、いかがですか。

F お話、ありがとうございます。お伺いしたいのは、時間割についてです。時間割がこのようにきっちりと区分けされているということですが、先生方がこれに従って時間割を組まざるを得ないので、自由性がないというところでは実際いかがなのかということと、学生さんが履修する上で、必ずこの時間割で取らなければいけないというその不自由さに、何かありませんでしょうか。

日比谷 私どものウェブサイトの教養学部のリベラルアーツ英語プログラムというところがあるんですが、そこをクリックしていただくと、1年次のモデルみたいなのが出ていまして、1年生のときはほとんど自由はないです。月水金の3限と、火曜の3限と木曜日の2限、3限で一般教育科目か専門の基礎科目を取って、あとは保健体育実技と理論ぐらいで、ELAのどのレベルにプレー

スされたかにもよりますけど、ほとんど自由度はないんですね。だけど、そういうものだと思っているので、そこで2年以降も、この枠の中で取ることはみんな理解しているので、学生はそうやって取っていきます。

教員の方は、時間割はこの枠を示して、こういう枠にはこういう科目が入るんですよということも言って、今、学生から見ると、専門の分野はメジャーですけども、教員の方はもう少し大きいくくりで、デパートメントというものがありまして、1つのデパートメントで複数のメジャーを提供していることが多いと思いますが、そうすると、そのデパートメントで時間割を組んでいくわけです。

コンピューターを入力するんですけど、これはうまくやっているんだけど、規範に合っていないところに入れようとすると、取りあえずはじかれる仕組みになっています。はじかれちゃったら、何かおかしいところに入れようとしているなということにまず気付く。それでもいろいろな理由によって、たとえばこれだと、月曜日の1限、2限、3限とか縦に組めないですね。非常勤の先生でも、どうしても月曜の1限、2限、3限しか来れないという方がいらっしゃるんです。そうすると、コンピューターでははじかれたものをリストにして出して、一応、学部長が許可するというような格好にはなっているんですが、そのステップを踏むことによって、十分ほかのところにも組める専任が月曜の1限、2限、3限にやっているというようなことは一応ブロックするようにしています。

しかし、1限開講をものすごく奨励しているにもかかわらず、少ないですし、もうちょっと、ここにしなさいということはありませんけれども、デパートメントの中で、たとえば1限のコースをいくつかは出してくれと、自分たちの中で調整してくださいというようなことはやった方がいかなと思っています。

D GPAのことで1点だけお聞きしたいのですが、慶應の場合だと、学生がDを、Dというのは、慶應の場合では不合格を意味しますが、外に出す成績表にそれが載りません。学生にとっては、自分はDを取ったというのは分かっているのですが、外に出さないということがあるので、少しなめて掛かるようなこともあるとは思いますが。ICUの場合は、Fを取った場合、外に出しているの

かどうかというのをまず1点お聞きしたいです。

日比谷 載ります。

D 私の勝手な想像なのですが、GPAがうまく機能すれば、さらには履修の上限をかなり低くすることができれば、授業の数は20%以上減るのではないかと推測しています。

いずれにしろ、GPAを学生に意識させるという視点で、Fを取った学生がどういう反応を示しているかということと、対外的にFをどう公表なさっているのかを教えてくださいませんか。

日比谷 成績表には、Fじゃなくて、Eですけども、Eというのは残ります。GPAが各学期出ますから、Eをたくさん取っていると、たとえばGPA0.8といったことになります。ただし私は、学生がたとえば就職するような先に出す成績証明書にそれが出ているのかどうかは、正確には知りません。ただ、私たちと面談する段階では、卒業する最後の段階までこの学期にEがいくつあったというのは明確に分かるようになっていきます。

ただ、最終的に必要な単位が取れなければ、卒業が延びますので、いつ何を取ったということを追っていけば、ある程度、想像していくことはできると思いますけれども、登録した数がもともと少なかったのか、落ちたのかは、そのところは調べてお答えします*。

それともう1つは、教室の配当の話でしたよね。実は私たちも教室は足りないんです。それは1限をフルに入れば足りないはずはないのですが、実際は月水金の3限は大変に人気がありますし、火木の3限、2限、3限も人気があります。それからスーパー時限も人気がありますので、混んでいます。なるべく調整していますが、授業の数が適切かというのなかなか難しいところで、もともと少人数制ですから、履修者が少ないということもそれほど気にしないで来ています。結局、たくさんの

科目を提供しても、ぶつかって取れないという苦情が多いので、そうであれば、私はもう少し授業の数は減らしてもいいかなと思っています。

D そのGPAの話なのですが、Eが対外的に出ているか出てないかというのは大きな問題だと思います。特に就職には大して影響はないのかもしれませんが、たとえばアメリカの大学院に行くというような状況の中で、GPAが出ていれば、そしてICUのようにEが勘案されていれば学生は、GPAが下がってしまうので「不合格」という成績に敏感になると思います。慶應の場合学生は、不合格が外に出される成績表に掲載されないの、不合格を得るということにほとんど抵抗を感じていないと思います。

そうなった場合、たとえば成績表に不合格のものが1個も並んでない状態でアメリカの大学院に成績表で送られていくのと、10個も20個も不合格があるのだけれども、単位は全部取っているというのでは、向こうに与える印象が違ふと思います。でもその不合格がGPAに換算され、対外的な成績表にも掲載されれば、学生の方もこれを意識して、不合格を取らないという履修行動に出ると思います。いかがでしょうか。

日比谷 不合格がGPAに反映されるということは徹底しているので、そこのところはよく分かっていると思います。もう1つは、3学期連続とか通算4学期GPA1.0以下というのをローグレードというので、略してローグレといわれているんですけども、ローグレになることの重さというか、それはよく了解されていると思います。

1回目はアドバイザーが注意するんですけど、2回目は教養学部の副部長が面談をして、3回目になると学部長面談ということで、これもすごく厳格に切っているわけではなくて、何か精神的な問題があったとか、情状酌量の余地があったりすると、所定の手続きを経て、次の学期に登録することが認められたりするわけです。

これをどの程度にするかはなかなか難しい問題で、そういう人がたくさんたまっても、どこかで見切りを付けた方が本人のためという考え方もあれば、まあ、人にはチャンスがあるかもしれないという考え方もあるので、そこは難しいところだと思います。ただ、不合格になったことが悪い結果を招くことについては、それなり

* 不合格(E)となった科目と成績の証明書への記載有無は以下のとおりです。

英文成績証明書：記載される
和文成績証明書：記載されない

ご質問では、アメリカの大学院等への出願時には、記載されていることが重要とのご意見でしたが、そのようになっています。

の意識を学生は持っていると思いますので、最初にすべきことは、最後の成績証明書に何が載るかとかいうのは先の話ですが、GPA で不合格のものは0点になると徹底することです。ぱっちり数字で出るから分かります。先学期はたとえば3.0 だったのに、今学期は2.2 になって、やがて0.8 になるんだぞということが分かることは重要だと思います。

F 私は日吉の学生部の人間で、これは事務系が質問すべきことではないと思いますが、前、国際にいたところに、大学評議会場でオブザーバーで参加したときに、GPA についての議論が行われたときがあります。そのときにも、そのGPAを導入する、しないという議論があったのですが、念のための確認ですけれども、ICUでAという評価は、絶対評価、相対評価という考え方がありますが、私は別に個人的に理解していたことは、その評価が相対評価で行われようが絶対評価で行われようが、あくまでもAという評価が出たら、もうそれはすなわちGPAの点数上は4と見なされると思っていましたけれども、でも、どうやらそのGPAを導入することと、その相対評価をしなければいけないということとが、何か同義でそのときすごく議論されていたことがあって、そのことがどうしても理解できませんでした。

日比谷 それは別ですよ。別というか、Aが付けば4です。

司会 慶應の中に広く広がっている誤解が、GPA＝相対評価という誤解です。これが広く蔓延していて、そこで論議がブロックされてしまいます。

日比谷 なるほど。あんまりみんなが甘くすると、いわゆるインフレーションといえますか、イージーA (easy A) というのが出てくると。それで、さっき言ったアドバイザーとの履修登録日の面接は、面白い副産物もあるんです。担当学生数が多いのは問題ですけど、大体30人ぐらいの人を見ます。順番に見ていくと、特に一般教育科目でみんなが多く取っているような科目の中に、来る学生来る学生、Aを取っているよという科目はあるんですね。逆もある。この学生はこんなに普通はできるのに、え？ これD？ みたいな感じで、3人ぐらい、え、

またこれD？ とか、そういうことがあります。

それで、この教員はちょっと甘すぎるのではないかと、辛すぎるのではないかということが、数を見ると分かることはあります。それは別に言い付けるといような意味ではありませんけれども、たとえば学部長などに、あの科目はAが多いのではないかとか、すごく不合格者が多いのではないかと言う人はいますし、私は言うのはいいことだと思います。

特に新しく来た先生とか、私もそうでしたけど、ほかの大学から移ってきた人は、違う常識の中で生きてきたので、こういう共通理解の下に成績を付けているというのが分かってない人がいるのはよろしくないと思うので、個人面談をして、ある程度まとまった数の成績をぱっと通して見ることのメリットかなと思うことがあります。

もう1つは、学期ごとにGPAの平均というのを、今ですと専任教員の平均と非常勤教員の平均、非常勤の人がちょっと甘くなる傾向があるのではないかというのを見ているのと、一般教育科目は、自然科学系、社会科学系、人文科学系ごとに出していますし、それぞれのメジャーごとにも出していて、毎学期、次の学期の教授会で配付されますので、それを見て、すごく自分は甘いのではないかといったことを感じることはありますし、何か極端な数字があると、質問が出たり、説明を求められたりすることはあります。

だけど、相対評価イコールGPAというのは、それは違いますね。

司会 ありがとうございます。司会者から最後の質問で、ちょっと答えにくい質問かもしれないんですけど、我々、この学期制度の問題を考えるために、3学期制度を採っているICUの先生に来ていただいたのですが、そもそも学期改革というのは必要なのでしょうか。それを、慶應にもいっちゃって、ICUにいっちゃった先生からこの間の論議で、どう映っていっちゃるかを最後にお聞かせいただけますでしょうか。

日比谷 学期改革は必ずしもしなくていいと思いますけれども、7月と8月に学生を海外に送りたいかということ、ぜひとも考えるべきで、別にそこで送らなくても、交換留学に行けばいいと考え方もありますけど、夏に送

るというのは1つのメリットだと思います。私どもでいえば、リベラルアーツ英語プログラムの単位が先取りできるから、後でもっといろいろな科目が取れるとか、それから、韓国の話をしましたけど、我々の期待としては、交換留学だと3年からしか行けませんが、今、新しく導入するサマープログラムは2年生でも基準を満たしていれば行けますので、韓国に6週間行って、あと韓国の場合は、韓国語を学んでいる人は韓国語のコースを取って単位を取って帰ってきてもいいと。そうしたら先へ進める。

実際、今回、アプリケーションを出してきた人は、全部、英語だけで勉強できるけど、かなりの人が韓国語を取っている人で、それで行きたいというわけですね。行ってみたら、おお、なかなかこれはいいじゃないかと。それで韓国語の学習も進んだし、これをきっかけに、来年からの交換留学で、アメリカに行こうと思っていたけど、韓国に行ってみようかなというような人が出てくることを期待しています。

そういう意味で、夏に6週間ぐらいで外国に行けることはいいことだと思いますから、7月と8月が空くことのメリットは大きいんですね。それで、再三申し上げているように、4月に始めちゃうと、7、8月休んで、また9月から学期が続くとするなら別ですけど、集中力が途切れるからあんまりよくないですよ。そのために、4、5、6月で完結するシステムにすることは意味があるという気がします。

もう1つが、教員の側から言うと、私が慶應にいた最後のころは、8月の初めごろに成績会議などをやって、9月は15日過ぎぐらいまで休みでしたけれども、7月はとにかく毎日学校にいましたし、8月前半もまだ大学にいましたが、これでは学会に行きにくいですね。2002年にICUに移りまして、たまたまでしたが、その年の夏にフィンランドで学会がありました。この学会はいくつか入っている学会の中でも私が一番好きなものです。小さい分野で、来る人は決まっているのですが、1週間ぐらい田舎の町に行くのです。すると、「おお、久しぶりに来たな」と言われました。夏でしたので、白夜で、夜まで明るかったのですが、私、大変な酒飲みですけども、強いお酒などを深更夜まで飲みながら、いろいろな、当時はもちろんこういう仕事をしてなかったので、言語学の話をしていたんですけど、そのときは、慶

應の方には申し訳ないけど、移って本当によかったと実感した瞬間でした（笑）。

大学はどこも忙しいですけど、国際化の一番のかなめは教育で留学生を引き受けるということだと思います。内容のない人が技術だけで何かうまい授業をするのは本当にむなしいものがあるって、多少下手でも、本当に高い内容を持っている人は、学生が付いてくると思います。

そのために必要なのは、研究の進展なので、それには、たとえば学会参加であるとか、フィールド調査、フィールド調査は別に夏に行かなくてもいいですけども、そのようなことを考えると、7月と8月が空くことのメリットは、私はとても大きいのではないかと思います。

セメスター制だと、学期に無理が生じるけど、そうでなかったら、おっしゃる通りで、学期制度の議論にそんなに一生懸命になることもないかなと思います。

司会 有意義なお話が聞けました。先生にもう一度、拍手をお願いします。ありがとうございました。

慶應義塾大学教養研究センター
基盤研究「慶應義塾大学のカリキュラム研究」企画
国際基督教大学（ICU）の3学期制とカリキュラム

2013年6月27日発行
編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 不破有理

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1
TEL 045-563-1111（代表）
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2013 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。
ISSN 1880-3628
ISBN978-4-903248-43-1

